
魔砲使い～エヴァ世界～

kein

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲使い〜エヴァ世界〜

【Nコード】

N5797C

【作者名】

kein

【あらすじ】

魔砲、魔法と違い、銃に似た武器、魔砲銃を使い攻撃や治癒、防御などを引き起こす事ができる。それ故、それを扱う者は、魔砲使いと呼ばれる。

プロローグ

とある何処か分からない場所（爆）

カチャ、カチャ、カチャ……チャキンッ

「ん、これをこうしてつと……できた」

ガシャ！

それは黒く、龍というマークがあり形が大きい銃があった。（砲身の部分は、黒い龍の頭が形造られている）

「完成、龍迅旋」

そう言つて、その銃を手前の机に置き、軽く伸びた。

「うーん！！はあ、疲れたなあ」

そこへ、彼の肩を軽く叩く者がいた。

「お疲れさま、シンジ」

彼の名は零。

『豪速四連銃の零』と呼ばれ、ガンマンの間では既に知られている通り名だ。

その名の通り、彼の両腰には二丁ずつの拳銃があった。

「へえ、これが 龍迅旋 か、大きいね」

「うん、まあね」

ちよつと齒切れが悪い少年、シンジ。

彼は、名字を捨てている。

一々名字もつける必要はないと思つたからだ。

彼の腰には一本の刀がある。

これは元々、彼の私物だったのである。

（元から身につけているのは、シンジでも分からないらしい）

零がふと思ひ出して、ポケットに手をつ突っ込んで一通の手紙を差し出した。

それを不審に見て、その手紙を受け取る。

「……何これ？」

「いや、見て分かるでしょ？手紙だよ」

「そうじゃなくて、しかも差出人書いてないし」

手紙の中を見てみると一枚の紙と切符と写真があった。

紙の方を見ると、

『来い ゲンドウ』

殴り書きで書かれていた。

それを見て、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人は絶句した。

それと同封されている写真を見ると、二人は、呆れて物が言えなかった。

「・・・・・・・・小さいね」

「・・・・・・・・うん、小さい」

二人は写真の女性（特に胸）を見て呟く。

そして、一枚の切符を見て、

「・・・・・・・・帰す気はないって事だね」

「そうだね。って、『第三新東京市』？そんなのこの国にはないよ（ちなみにここは大和という国である。一種の異世界。つまり、別世界へと連れてこられたのだ。シンジが）

「・・・・・・・・僕の家だよ、て言うかどうやってここに届くんのだろ
う？」

「・・・・・・・・姫がやってたりして」

「・・・・・・・・ありえる」

零ゼロが言った姫というのは、姫子という彼の恋人である。

銀色の長い髪に青みがかったエメラルドの瞳、少女とは思えないくらい
の大きなバストがある美少女。

しかも、彼女には姉が居る。

これもまた、世界の何処を探しても絶世の美女は彼女のみ！と言う程のダイナマイトボディを持つ女性である。（髪の毛も銀色の長い

髪である)

取り敢えず、

「……一度行ってみようかな」

「え！？ここに!？」

「うん」

「ど、ど、どうして!？」

と、ワナワナと肩を震わせて、シンジに詰め寄る零。

「……何となくだよ、それに、僕が産まれた国だからね」

そう言つて、立ち上がり、机の上に置いてある 龍迅旋 を右腰に

掛け傍に掛けてある黒いロングコートを着る。

それを見て、溜息をつき

「僕達も行くよ」

「……大丈夫なの？」

「平気平気！姫達なら納得するよ、と言つより。彼女達全員シンジと一緒にいくんだつたら、躊躇い無くついていくと思つよ」

サラリと爽やかな笑顔で言い放つ零。

それを聞いて、黒色の長い髪を揺らして首を傾げるシンジ。

何処へ行つても鈍感。

その後、姫子達に相談した後、自分達もついていくと言い張つていたので、結局、8人と一匹(?)で、行く事になった。

運命の齒車は既に狂っている。

この先どうなるのだろうか……。

戦闘機の攻撃やミサイルでビクともしていなかった巨人が魔砲獣の攻撃にダメージを受ける。

巨人はATフィールドを展開するも、一点突破攻撃には為す術もなかった。

そして、胸にある紅い玉コアに罫が入り、砕け散った。

巨人が大きな音を立てて仰向けに倒れる。(あ、呆気な)
それを見て、無数のガトリングが止まり、消えていった。

「・・・早く第三新東京市へと行こう」

シンジが促して、後ろにいた零達を連れて向かう。

第三新東京市へ。

迎えは、テレビ板や本編と同じく二時間以上もの遅れで着いたそう
だ。

その時には既にシンジ達一行が第三新東京市に到着している事を知
らない。

第一話 一行、襲来（後書き）

攻牙白狼弾：白い狼が複数で、チームを組み敵を狩るのが特徴な魔砲獣。

鉄牙砲龍弾：巨大なガトリング砲の形をした鉄の龍。攻牙白狼弾と違い結構大きい。

無数の弾丸は容赦のないダメージを敵に与える。

やっちゃった、シンジを魔砲使いにしちゃった。

……っあ、旋迅龍の説明忘れた。

第二話 嫌な予感

第三新東京へ行き、ネルフ本部に直行したシンジ達は、父親のゲンドウと対面した。

「……久しぶりだな、シンジ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……誰？」

「……」

「……」

もの凄く長い沈黙が通った。

(普通当たり前だろ)

見かねたりツコがシンジ達に言う。

「シンジ君、あれが君のお父さんよ」

「あつそ、髭くらい剃れば？」

「……」

「しかも全然似てないね」：零

「シンジが母親似だからじゃないの？」：姫子嬢

「どうして、ああ言うのからこんな綺麗な子が生まれるんだろうな？」：黒姫

「人間の遺伝子というのはイマイチ分からん」：阿修羅

「や　ん　」 (訳：ほんまやな、なぜ、こないな美少年が生まれるんやろな?)：鬼丸

「遺伝子の神秘には深く考えないとならないね」：雪男

「あんなのが父親だなんて、シン兄ちゃんに同情しちゃうよ」雪女

など、ぼろくそに言うシンジ他七名（六名と一匹？）その言葉を聞いて、いじけるゲンドウ。

壁に向かって蹲り、床にのの字を書いて涙を流す。

それを冷めた目で見る、シンジ達。

「・・・それよりも、何か僕にご用で？」

本題を聞くシンジに慌てて答える、副司令の冬月コウゾウ。

「そ、そうそう、君にエヴァンゲリオン初号機に乗って貰いたいのだよ」

「エヴァンゲリオン初号機？ああ、あの紫の鬼ですか」

そう言つて、赤い水に浸かっている鬼を指さす。

「そうだ、あれに乗れるのは13歳から15歳の指定された少年少女達だなのだ、我々には乗る事ができないだから、君に頼るしかないのだ」

そう言う冬月の目は真剣だった。

だが、

「お言葉ですが、僕は乗りませんよ」

そのキツパリした言葉に戸惑う冬月とリツコ。

「な、何故だね！」

「そ、そうよ、どうして」

「良いですか？落ち着いてくださいよ、貴方達はこう言いましたよね、『これに乗れるのは13歳から15歳の指定された少年少女達』って」

確かに彼らは『13歳から15歳の少年少女達』と言っていた。

シンジはそこが拒否する理由だという。

なぜならば、

「僕は、その指定年齢を過ぎてるんですよ」

と言った。

その事に固まる冬月とリツコ。

それに首を傾げて言うシンジ。

「外見を見れば分かるでしょ？普通」

「……確かに、外見を見れば190近くまである身長に少し大きな掌、14歳にしては不自然すぎる。」
「言うより。」

「あんな、人を飲み込むような機体になど乗りたくもありませんね」
「そう言う事らしい。」

彼の母、碓ユイが初号機に飲み込まれた記憶が、戻っていたらしい。
その事にまた固まる。

そして、止めの一発。

「それと髭、お前はもう碓家から縁を切られてるからな、今後一切碓という姓を使わないよ、六分儀総司令殿」

「そう言っつて、黒姫達を引き連れて、NERVから去った。」

後に残ったのは、思いつ切り固まったままの髭と冬月とリツコのみだった。

「ただいま戻りました。お爺様」

シンジは今碓本家の居間にいる。

「おお、シンジ帰ってきたのか！」

碓ゲンゾウ、碓ユイの父親でありシンジのお爺ちゃんなのだ。

まあ、それは兎も角。

黒姫達は温泉に入っている（勿論、男湯と女湯に別れています）

「いつ見ても綺麗じゃの、その髪は」

「そう言っつて、腰まで届くシンジの黒い髪の毛を見るゲンゾウ。」

確かに、誰もが羨ましがするような黒髪である。

「そ、それより、次に来る使徒に備えていろいろと準備をしなくちゃいけませんし。学校も行かなきゃなりませんし」

「学校の方は、儂に任せておけ」

「そう言っつて、どんと胸を叩く。」

頼もしい限りだが、シンジは嫌な予感がしてならなかった。

その嫌な予感が、的中する事になるのは別の話。

晩ご飯の時はフランスとイタリアのフルコースを碓家の食卓で食べる事になった。

(その時、姫子嬢が五人前を食べていた事を追記する)(ライライ

(- - ;)

第二話 嫌な予感（後書き）

あゝ、髭に鮫牙大刀弾をぶち込ませたかった。

ツチ！（をひをひ）

次は、学校編ですね。

どうしましょ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5797c/>

魔砲使い～エヴァ世界～

2010年10月9日17時58分発行